

# シラー美学における「愛」について

## 要 旨

シラーはその『哲学的書簡』の中で愛の哲学を展開する。それによれば、愛とは宇宙におけるあらゆる偉大なもの、美なるもの、卓越するものを表象し、そのことによって、それらをわがものとして同時に実現する能力である。このように解された愛とは、実は想像力に他ならない。というのは、想像こそあらゆる表象を目ざめさせ、多様なものとし、それらを高め、神性の理想に近づくことができるからである。そして「各人がすべての人間を愛するならば、各人は世界を所有し、神性に近づく。」想像力豊かな詩人は愛するものであり、全宇宙を愛し乍ら所有する可能性をもっている。このような愛を客観的愛とよぶならば、主観的愛は感覚的魅力において作用し、心の感受性を意味し、血の情熱を意味する。したがって主観的愛は、肉体的、性的脅威をもつ。それゆえ、シラーはこの主観的愛を Elysium にまで高め、愛を安全なものとして永遠化しようとする。

以上のような「愛」についてのシラーの見解を、かれの戯曲作品を通じて跡づけてみる。『フィエスコ』では愛と権勢欲が対比され、両者が同一人においては共存、合一し得ず、破局に導かれる。『ルイーゼ・ミレーリン』では個体的な愛を目ざすものの悲劇、階級の対立を超越して、自らの独特の人格性の根抵のうえに新たな愛の世界を創造せんとしたものの破局がとかれる。さらに『ヴァレンシュタイン』において、本来、この世のものではない高次の愛を、この世において実現しようとしたものの悲劇がとかれている。

山 川 淳次郎

(一)

シラーは自己の創作的活動を理論的に基礎づけるために美学的研究に向かったといわれるが、このかれの美学論において、その理想主義的傾向は決定的である。すなわち、かれの場合、すべて制約された知識を無制約の知識にひきもどし、すべての経験を人間精神における必然的なものに固定しようとする。ゲーテの場合と対比するならば、シラーの理想主義は自らに即して自然を解釈し、ゲーテは自然に即して自らを解釈する。これは一見シラーの美学がプラトンの、プロティノスの方向を示していることを意味するが、このような立場からすると芸術の理想乃至芸術家の理想は超越的世界に、永遠に変化することのない世界に移される。それゆえ、芸術家にとっては努力さるべき目標、しかし決して到達され得ないような目標が形成される。というのは人間は生成、変化の世界に属し、永遠に持続する作品は作り得ないからである。

このような理想主義的態度はかれの美学論に一環してうかがわれるところであって、たとえば『カリアス書簡』において、かれは美を「現象における自由」として規定し、さらに『優美と尊敬について』において理想美たる優美を感性と理性、傾向性と義務の調和的心情状態としての「美しき魂」の表出であるとし、さらには『人間の美的教育に関する書簡』において美を形式衝動と素材衝動を調和する遊戯衝動の対象である「生ける形態」に求めたが、これら美の世界はすべて観念の世界におい

て、あくまでも理念としてとらえられるべきものであり、その仮象性によって特徴づけられるべきものであった。そしてこのような美の観念性を強く説く立場は当然、シュレーゲル兄弟、ヘーゲル等によって代表される浪漫主義の芸術観にそのまようけつがれていくものである。浪漫的芸術形式はヘーゲル流にいえば、「内容である理念が豊かな想像力によって発展し形態がそれをおおいきれなくなった段階の形式」なのであって上述のシラーのいう美の観念性、仮象性を裏づけるためには我々の精神力としての想像力が重要なものとなる。したがってシラーが当然、美の理想性、観念性を説く場合に想像の作用が説かれなければならないのであろう。如上の事情をシラーの著作を通して探ってみたいと思ふ。かれは果して想像作用を認めていたであろうか、また認めているとしたらいかなる要素としてであろうか。

(二)

まず、この問題に若干の示唆を与えてくれるのは“*Theosophie des Julius*”<sup>(1)</sup>である。ここではシラーの愛の哲学が展開される。それによれば、

愛は有情の創造物の中における最も美しい現象、精神の世界における最も強力な磁石、敬虔と最も崇高な徳の源である。愛はこの唯一の根源的力の反映、卓越するものの魅力、人格性の瞬間的交換の基礎づけられたものである。人間は憎むことによってあるものを失う。人間は愛

することによって豊かになるであらう。人間の憎悪は自殺行為である。エゴイスムは創造された存在の最高の貧困である。愛は単調な心の中には存在せず、調和的な心の中に存在する。柔和なデズデモウナは、かの女のおセロウをかれの耐えた危険のために愛する。男性のおセロウは、かれのために流した涙ゆえにかの女を愛する。全自然を恋人のように抱きたくなるような一瞬間があるものだ。自然の小なるもの、大なるものにおける美、偉大さ、優秀さを拾いあげ、この多様性のうえに偉大な統一性を見出すまでになった人間は、すではるかに神性に近づいている。全被造物はその人間の個性に融解する。どの人間もすべての人間を愛するならば各人は個々に世界を所有するであらう。「私は利己的ならざる愛の現実性を信ずる。もしもそれがなければ私は絶望する。私は神性を断念する。不滅と徳を断念する。」<sup>(2)</sup> 自らのみを愛する精神ははかりしれない空虚な空間を泳ぐ原子である。愛は統一をめざし、エゴイスムは孤立である。愛は繁栄する自由国家の支配的市民であり、エゴイスムは荒れはてた被造物の中の専制君主である。エゴイスムは感謝に対し種をまき、愛は忘恩に対し種をまく。愛は贈り、エゴイスムは貸す。諸要素の魅力が自然の具体的形態を完成させた。このような魅力が愛である。それゆえ、愛は我々が神に類似したものへと登りつづけたための導き手である。我々は要求することも、意識することもなくそれをめざす。

以上、シラーの述べたところを要約したのであるが、宇宙の諸部分が引力によって相互に結合されているのと同様に人間は社交、友情、愛によって互に依存し合う。それは自然界、人間界を支配する法則であっ

て、これをシラーは愛と名づける。このようにシラーは自己の哲学において愛を宇宙の中心的存在として、したがってまた人間の共同生活の中心としたのである。「プリズムの中で白色光線が七つの光に分けられるのと同様に神的我自我は無数の感覚的実体に分散する。七つの光線が一つのおかるい光線にまたとけあうように、この実体のすべての合成から神的本質が生ずる。」<sup>(3)</sup>そして、もしも宇宙、自然が「無限に分かたれた神である」ならば、これらすべての分かたれたものを再び止揚し、そうすることによって「神を産出」するという課題が人間に課せられる。この分離したものを統一にひきもどすのが愛であり、この愛による神秘的使命は実際、哲学者、詩人、芸術家のみが一般の人間にとって代って引きうけることができる。神の芸術品である自然をもう一度愛によって追創造するという課題、したがって、その完全性を分有するという課題は芸術家の課題である。このように考えるならば、シラーのいう「愛」とは実は想像力に他ならない。想像は神の芸術品の中に理想をとらえるのみでなく、そうすることによって理想を実現するのである。

シラーの弁神論はかくして美的世界概念によって構成され、その概念の中では想像が人間にとって重要な根源的認識器官である。この点で、かれはすでに初期浪漫派の先駆者であるといえよう。また想像を本領とするシラーの詩的氣質が神の芸術品である宇宙にまで移されたのである。ではシラーは「愛」のもとに何を理解していたのであろうか。それは宇宙におけるあらゆる偉大なもの、美なるもの、卓越するものを表象し、そうすることによってそれらを我がものとし同時に実現する能力で

ある。したがってそれは前述の如く想像に他ならない。なぜなら想像のみがあらゆる表象をめぐみさせ、多様なものとし、高めることができ、それによって神性の理想に近づくことができるのである(あくまでも観念的にはあるが)から。「もしも各人がすべての人間を愛するならば個々の人間は世界を所有するであろう。」<sup>(4)</sup> 全世界を所有することは神であることを意味する。シラーは明らかにこれを確証する。かれはいう、「もしも我々が神の作用的全能という Real-Idee を有するならば、我々はかれと同様に創造者であろう。」<sup>(5)</sup> と。Julius の Theosophie におけるシラーの関心事は神性のこのような Real-Idee である。

詩作し哲学する精神は友情において愛において自己を宇宙へと拡大する。かれは完全性の幸福を享受し実現する。かれは神の統一性をあらたに産出する。神を産み出すのである。かれはあらゆる感覚的実体をその想像力によって表象し、それらを自己に合一することができるからである。愛の活動はこのように詩作活動と同一の活動である。そしてまた、「愛は人が愛することのために豊かになることを意味する。」<sup>(6)</sup> 想像力豊かな詩人は愛するものである。なぜならかれは素質上、全宇宙を愛し乍ら所有する可能性をもっているからである。かれのみが他の色彩の下に物を見ることができ、他の肉体の下に悩むことができる。ラインヴァルトへの手紙<sup>(7)</sup>の中には友情や愛が「詩作能力の他の作用」として定義されているが、これは想像の表象の中に人間にとって可能なすべての観念性的実現が含まれているということを物語っているのである。またさらに「私の内なる、また外なるすべては私に似た力の象形文字にしかすぎない。」

<sup>(8)</sup>「の語にみられるように同等のものは同等のものによって認識されうるという思想もシラー独自のものではあるが、古代の神秘主義的思想に相通するものである。ともかく Julius の Theosophie においては世界の認識が美的能力としての想像力、直観力によるものであり、しかもそれは神の芸術品としての宇宙を前提とすると説かれている。シラーの哲学思想にはこのように美的なもの、時として倫理的なものが混入し、そのためにかれの哲学には特徴的な、しかもかれによって意識されない多義性がある。

(三)

以上みられたようにシラーにとって愛は想像力と同一視されるものであったが、またそれは肉体と精神との領域を結合する働きをもする。即ち“Fantasie an Laura”<sup>(9)</sup>には、

Meine Laura! Nenne mir den Wirbel,  
Der an Körper Körper mächtig reißt,  
Nenne, meine Laura, mir den Zauber,  
Der zum Geist monarchisch zwingt den Geist.

Körper will in Körper überstürzen,  
Lodern Seelen in vereinter Glut.

とある。世界は愛がなければカオスに陥るであろう。このような愛の主観的解釈は先述のいわば客観的解釈とは異なる。この点にも先にふれたシラーの哲学的概念の曖昧さがあり、動揺がある。さらに主観的にとらえられた愛は肉体の感性的魅力においても作用し、この場合、愛は性的意味をもつ、愛は精神の感受性を意味するとともに血液の情熱を意味する。愛におけるこのような肉体的性的な面の脅威に対しシラーは愛を Elysium に高めることによって愛を安全なものにしようと努める。人間は神のそばで神となり永遠化されたと思う。そして神の居る天は Elysium となる。ここにおいて愛と Elysium はかれの形而上学において同一化する。<sup>(9)</sup> “Die Entzückung an Laura” はこの間の事情を明らかにする。ここでは自然が有限性を忘れ、より高度の存在を実現する。この意味での Elysium は生命の最高の高揚の瞬間を意味し、神聖なものに接する。

やうに

Der Triumph der Liebe

Seelig durch die Liebe

Götter—durch die Liebe

Menschen Göttern gleich!

Liebe macht den Himmel

Himmelscher—die Erde

Zu dem Himmelreich.

Weisheit mit dem Sonnenblick,

Große Göttin, tritt, zurück,

Weiche vor der Liebe!<sup>(11)</sup>

かようにして一見主観的にみえた愛、感性的な愛も宇宙の巨大な空間に投射される。肉体において起った事柄は神的宇宙にまで高められ、知性も愛から引き下がることを要求される。

しかし、このような愛も現実には矛盾多き愛として体験され、又失われた神に対する憧れとして解釈される。神はかつては真の愛のうちに実現されたが、今日では単に記憶としてのみ現存するにすぎない。Elysium は失われた彼岸に対する一種の代償であるにすぎない。無限の自由の救済の領域であった Elysium、神的な真理の啓示と一致した愛、これらはすべて現実においては追憶でしかない。愛する者同志にとって Elysium は思い出しにしかすぎない。“Das Geheimnis des Reminszens” 愛はかつて人間によって実在化された神性の思い出であり、神性は神性としてその人間的断片において今もって尚、貧弱な曖昧な仕方生きつづけている。<sup>(12)</sup>

#### (四)

次に『ゲヌアのフィエスコの叛乱』においては愛はどのような展開をするであろうか、理解を容易にするためにこの戯曲のあらすじをのべよう。

ラヴァニャ伯フィエスコは政敵のジェノア公ジャンネティノ・ドリアの妹ユリアを愛し妻レオノーレの嫉妬をかう。ジャンネティノ・ドリアは黒人に金を渡しフィエスコを暗殺させようと企てる。他方、策士カルカニヨはレオノーレに愛を抱いている。そして叛乱を起こして思いをとげようとフィエスコを煽動する。フィエスコがドリアを攻撃し、家を留守にするように。カルカニヨの友人のサッコも油断ならぬ男で叛乱の味方である。そしてすべての事態はフィエスコに都合に進展する。しかし、かれに誘惑、ジェノアの専制公になろうとする野望の誘惑が台頭する。しかしかれはこの誘惑を否定し、「ジェノアよ、自由であれ、そして私は一市民であれば幸福だ。」と叫ぶ。しかし、やがてはこの誘惑に負けて支配者となろうとする。一方レオノーレはフィエスコの身の危険を予感しフィエスコとともに逃げるようにすゝめる。しかしフィエスコは叛乱へとかりたてられていく。レオノーレは夫の身を案じ男装して戦場にのぞみ、死んだジャンネティノの着ていた外套と剣を身につける。悲劇的宿命、悲劇的イロニーである。フィエスコは妻のレオノーレをジャンネティノと思い殺害する。そしてかれはジェノアの支配者となるが、結局は海へつき落とされて溺死するのである。

まず、ここではレオノーレの愛とフィエスコの権勢欲が対比される。人間の心は二つの全能の神々、愛と権勢欲を同時に同居させることはできない。「愛は涙をもち涙を理解することができる。権勢欲は青銅の眼をもち、その中では永遠に感覚は光らない。愛は唯一の善をもち、他の被造物を断念する。権勢欲は世界をがらりと破壊し鎖の家と化する。」

愛は荒野においても Elysium を夢見る。<sup>(13)</sup>

愛は愛される者において尚すべてを所有するならば権勢欲は自らを奪われるとともにすべてを失う。愛はその夢の飛翔において荒野においてすら Elysium を実現する。すなわち神的なものの存在を実現する。フィエスコの奥方レオノーレが天に捧げた愛は権力の自惚れ高い虚勢から全智全能の神に至る遁走である。「浪漫的な愛の平原に我々を生かしめよ。我々の魂は天上の澄みきった青空のように清く、傷心の暗い思いにもはや染まらないであろう。その時に我々の生命は、鳴りひびく泉の如く美しい旋律で創造者へと流れ行くであろう。」<sup>(14)</sup>このように観念的にシラーによって企画された愛の世界はフィエスコ自身によって悲劇的に破壊される。権力の世界と愛の世界は若きシラーにとっては相互に合一されえないものである。にもかかわらず、それを試みる者は悲劇的な状態に陥り、愛の破壊者とならざるをえないのである。

## (五)

さらに『ルイーゼ・ミレーリン(たくらみと恋)』における愛はいかがであろうか。

市のやとわれ音楽師ミラーの娘ルイーゼはこの国の宰相の子息フェルディナントと相愛の仲である。ミラーはこの身分の異なる恋に大反対するが、ミラーの妻は目前の利益だけを考えて大賛成である。また宰相の秘書ウルムはルイーゼとの結婚を望んで居る。しかしミラーはウルムを好

まない。この縁談を断る。一方フェルディナントは父の策謀で以前に寵愛をうけていたレディ・ミルフォルトと結婚させられる破目に陥る。

これを聞いたルイーゼは悲しみ嘆く。ウルムは宰相に策を授け、ミラー夫妻を牢に入れ、それを救い出す条件としてルイーゼにフェルディナント以外の男にあてて恋文を書かせ、これをフェルディナントがみるようにする。ルイーゼのフェルディナントに対する愛は変らないが、フェルディナントはルイーゼを疑い我を忘れルイーゼを毒殺し、自らも毒を飲んで息たえる。

以上があらすじであるが、フェルディナントは愛の英雄であると同時に悲劇的英雄である。何故なら、かれはドラマ全体を通じて愛を、したがってまた自身の力をあまりにも信じすぎていたからである。かれは自ら獲得した愛を、神によって与えられ、神に対して要求し得る愛として結果させようとしたが、結果的には愛がかれにとっては単なる宗教、信仰となった。そして愛が宗教と解消し得ない仕方で融合する。なぜなら愛は魂を完成し、愛が直接万有への道を開く、若きシラーの愛の哲学がここではフェルディナントを代弁者として利用する。フェルディナントにとって宇宙への関係は全くかれの愛において実現される。実現されるべき愛はその直接的な宇宙的なものへ投射され、真理によって正当化されているとみられるであろう。特筆すべきことは若きシラーにとってフェルディナントの愛において性的な動機が全く後退していることである。かれの愛ははるかに精神的な情熱である。シラーはいわば宇宙の市民であり愛において創造さるべき世界の代表者である。

「恋の涙は髪の中の宝石よりも美しく眼の中に輝く。」<sup>(15)</sup>

愛に関してみるとシラーは普遍的なものをめざす。そこでは個体的なものは単に部分を占めるにすぎない。これに対してフェルディナントは個体的なものをめざす。そしてそれをかれは普遍化したいと思う。かれ自身の感情を愛一般と同一化することによって。これがかれの妄想の源である。フェルディナントとシラーは異なる愛の哲学の所有者である。愛の理想主義者フェルディナント、愛するもののためにいかなる犠牲をばらう心がまえができているフェルディナント、殺人者フェルディナント。かれは『群盗』のカール・モールにも酷似する。愛の理想主義者の試み、宇宙の市民として階級の対立を超越して自ら独特の人格の根柢の上に新たな人間によって担われる愛の世界を創造しようという試みは失敗せざるを得なかった。フェルディナントの悲劇はここにあり、かれの破局の原因もここにある。

## (六)

最後に『ヴァレンシュタイン』<sup>(16)</sup>の場合はいかがであろうか。この戯曲ではゲーテがいうように、二つの対立するテーマがとりあげられている。一つは想像的精神、一方では偉大なもの、理想的なものと、他方においては狂気や犯罪と境界を接する想像的精神であり、もう一つは一般的・現実的生命、一方では倫理的なもの、悟性的なものに接し、他方では小さいもの、いやしいもの、軽蔑すべきものに近い生命である。この

両者の中間に理想的で想像的で同時に倫理的な現象としての愛がおかれ  
ている。

若き正義の士であり『ヴァレンシュタイン』の根本的精神の代弁者と  
もいべきマックスとヴァレンシュタインの娘テクラはあらゆる歴史の  
彼岸にあって歴史に抗し、歴史を超越して愛の世界に生きる。この世界  
は現実性の世界に対立するものであるから、その意味で想像の世界であ  
る。愛はまさしくこの世のものではなく、他の高次の領域に属するもの  
であるがゆえに愛はこの世を敵しく体験しなければならぬ。この世に  
あっては愛にとっての隠れ場所、くつろげる場所はない。愛するものと  
しての人間は地球上ではよるべき者であり、他所者である。かれはい  
たずらに内的存在の純粋な観念性の中に逃れようとする。歴史的世界は  
希望なき世界であり、運命に属する世界である。愛は希望でのみあり得  
るけれども、この希望のこの世界での実現は永遠に許されないことであ  
る。このような愛の破滅は神の意志であろうか。地球上における美なる  
ものの宿命であろうか。

(1) 『哲学書簡』の中の一

Fr. Schiller: *Sämtliche Werke* V. Hanser Verlag S. 344 ff.

(2) *Ibid.* S. 351

(3) *Ibid.* S. 352

(4) *Ibid.* S. 350

(5) *Ibid.* S. 348

(6) *Ibid.* S. 348

(7) 1783. 4. 14.

(8) *Ibid.* S. 344

(9) Fr. Schiller: *Werke* Bd. 1. Knauer Klassiker. S. 15 ff.

(10) *Ibid.* S. 18

(11) *Ibid.* S. 34

(12) この「ちやうどは」“Die Götter Griechenlands.”の中にあらたわられてい  
る。

(13) *Ibid.* S. 376

(14) *Ibid.* S. 377

(15) *Ibid.* S. 412

(16) Goethe: *Die Piccolomini.*